# 生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察
## ― C.G.Jung『ヨブへの答え』をとおして―

山　本　典　子

## Ⅰ．はじめに

2009年7月に「臓器の移植に関する法律の一部を改正する法律（改正臓器移植法）」が公布され、2010年1月からその一部が、そして同年7月からは全面的に施行されることとなった。日本では1997年に施行された「臓器の移植に関する法律（臓器移植法）」によって、脳死後の臓器提供が可能となっている。今回の改正臓器移植法では、親族に対する優先提供の意思表示や、本人の意思が不明な場合の家族の承諾による臓器提供ができることとなった。このことによって、本邦においても今後、脳死下臓器移植の件数が増加していくことが予想される。しかし、腎臓移植については、移植を希望する患者数と臓器の提供数の現状を照らし合わせると（表1参照）、今後も生体腎移植が主流であり続けることは想像に難くない。

（表1）

| | |
|---|---|
| 2008年末透析患者数 | 282,622人 |
| うち、献腎移植希望の登録者数 | 11,814人 |
| 2008年腎臓移植件数 | 1,201人 |
| うち、生体腎移植件数 | 991人 |
| 献腎移植件数 | 210人 |

生体腎移植のドナーは、原則としてレシピエントにとって6親等以内の血族か3親等以内の姻族で、自らの意思で腎臓の提供を希望している健康な人に限られる。生体腎移植が施行されはじめた頃は、ドナー選択の際に血液型の一致や組織適合性（ＨＬＡ）を優先して考えなければならず、ドナーになりうる人が家族の中でも限られていた。しかし、免疫抑制剤などの医学や薬学の進

歩に伴い、マッチングの問題が以前に比べて緩やかになり、ドナーとなりうる人の範囲が広がってきている。結果としてドナーの意思がより尊重されるようになり、その心理的な側面が重要視されることとなっている。

家族の一員が腎不全となり、その治療法として生体腎移植を選択することを考え始めたとき、家族のほぼ全員がドナーになりうる可能性に直面し、それぞれが何らかの結論を出すことになる（春木　2005）。腎臓は一人に二つあり、たとえ一つでも正常に機能していれば健康な生活が営めるとされている。また、摘出手術中の事故によるドナーの死なども殆ど報告されていない。しかし、ドナーによっては想像以上の痛みを体験することもありえるし、残った一つの腎臓に不測の障害が起きない保証はなく、ドナーの腎提供という行為には生と死のありようが深く関わっているといえる。また、家族という匿名性のない継続的な人間関係の中で行われる生体腎移植は、家族内の関係性に変化をもたらし、そこに様々な問題が生じ得る。そのような中で、ドナーが腎提供という行為をどのように選択し、その体験をどのように自らの中に位置づけて人間としてどのような成長を遂げるかということは、自己決定権という名の下でドナー本人に任されているが、そこに臨床心理学的な介入が必要とされる場合もある。

前稿では、生体腎移植のドナーをグリムのおとぎ話「七羽のからす」の主人公に重ねあわせて考察し、ドナーにとって腎提供という体験が、個性化の道を歩む中でのひとつのイニシエーションとなり得るとの見方を示した（山本 2010）。

本稿では、C.G.Jung の著書である『ヨブへの答え』を読み解きながら、生体腎移植のドナーにとって腎提供という体験がどのような意味をもつものかということについて、考察を深め、ドナーが「からだ」と「こころ」を統合して新たな人生を歩んでゆく過程への、臨床心理学の立場からの介入の一助となることを目指したい。

## II．ヨブの個性化

旧約聖書の「ヨブ記」に関しては、古来よりユダヤ教やキリスト教の立場から、

神への信仰が深く、行ないの正しいヨブが、なぜ財産を失い、子どもを殺され、病に冒され死の淵をさまようなどの試練を神（ヤーヴェ）から与えられなければならなかったかということについて、多くの論がなされている。しかし、『ヨブへの答え』（訳書 1988）における Jung の切り口はそれらの正統的なユダヤ教やキリスト教的解釈とは異なり、神がヨブに与えた苦難の意義付けよりも、むしろ、理不尽な苦難を前にしたヨブが発した秩序への問いによる神の変容に焦点があてられている。そして、そこには宗派や国民性を超えた宇宙の中の人間観ともいうべきものが示されている。本章では Jung の論を元に、神から与えられた試練を前にした人間ヨブがどのように神を変容せしめたかということについて、個性化の過程の観点から論じる。

まず、旧約聖書の「ヨブ記」のあらましを記しておく。ウヅの地にヨブという名の男がいた。ヨブは多くの息子や娘、家畜、しもべに恵まれ、その地方の人々のうちで「最も大いなる者」であった。彼は信仰あつく、神に忠実であった。神（「主」）はヨブの忠実と不動の心を確信していたが、「神の子」のひとりであるサタンに挑発されて、ヨブの忠実を証明するために、サタンの手にゆだねてヨブから家畜やしもべ、息子、娘をとりあげ、また、ヨブ自身に病を負わせる。ヨブの妻や３人の友人、若年のエリフらヨブの周囲の人たちはヨブに、神を呪って死ぬように、神に許しを乞うようになどといった「人間的な」忠告でヨブの苦しみに「道徳的拷問を付け加えようと」（Jung 訳書 1998、27 頁）するが、ヨブは自らの正しいことを主張し、神を呪うこともなく、ただなぜ自分がそのような理不尽な試練をうけなければならなかったかという問いを発し続ける。すると神がヨブに「あなたは腰に帯して、男らしくせよ」（ヨブ記 38:3）と語り掛け、神とヨブの直接の対話が始まる。そして、ヨブが神に「わたしは知ります、あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはないことを。（中略）わたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」（ヨブ記 42：2－6）と答えたところで二人の会話はおわる。その会話の後、神はヨブにくだした全ての災いについてヨブをいたわり、以前ヨブが持っていた以上の財産や子どもを与えた、というのがヨブの物

語である。

この物語をどう解釈するかということは非常に難しい。Jungがここで問題にしているのは、「キリスト教の教育を受けた教養ある現代人が、『ヨブ記』の中に顕わになっている神の暗黒面に対して、どのように対決するのか、あるいはそれが彼に対してどのような影響を与えるのかということ」（訳書 1998、13頁）である。Jungはユダヤ教、キリスト教における既成の神観には納得せず、原始的ともいえる人間の混沌とした神概念を元型的に論じたものと思われる。神は「無知の言葉をもって、神の計りごとを暗くするこの者はだれか。あなたは腰に帯して、男らしくせよ。わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ」（ヨブ記 38：2－3）とヨブに呼びかける。神はヨブに神を批判の目でみつめる彼自身の姿を投影しており、対等の力を感じているとJung（訳書 1998）はいう。ヨブは神と直接対話するまでに「いつの間にか神でさえ持っていない神的な認識の高みにまで昇りつめて」（Jung 訳書 1998、28頁）おり、かつ、神への忠誠はかわることはない。ヨブ記の結末はJungの解釈では、理不尽な苦難を次々に与えられても最後まで毅然として自らの立場を明らかにし、主体的に運命を受け容れることにこだわり続けたヨブに神が脱帽したということであろうと考える。ヨブは神の全能を依然として信じながらも、神の本当の姿を経験し、神の中に人間の理解を超えた善と悪が混在する矛盾を知り、また、「人間は神について意見をもつべきでないし、ましてや神でさえ持っていない知恵を持つことは許されない」（訳書 1998、30頁）という神の考えを理解しており、平身低頭して受け容れることにより、最後には神を鎮めたのである。

ここにヨブのひとつのイニシエーションは完了する。彼は妻や友人らの忠告に従って安易な道を選ぶことはせず、融合的一体感、神秘的融即を断ち切り、あくまでも新しい秩序を得ようという自分の主体的な信念に基づいた個性化のプロセスを経ることによって、大いなる者、本当の神の姿を知り、個性化を実現したのである。ヨブは有限な存在である人間として最善のことをなしたといえよう。

神のほうでも、そのようなヨブと出会うことによって、変容を強いられた。

ヨブが神を知るならば、神もまた自分自身を知る必要がある。「神を認識する者は、彼に影響を与えるのである。ヨブを陥れようとする試みが失敗したことが、ヤーヴェを変えた」とJung（訳書 1998、49頁）は語る。神は彼の被造物である人間のヨブが彼自身を追い越し、道徳的に上であること、それゆえに彼が人間の状態にまで追いつかなければならないことを認めたのである。自然の中に大きな混沌たるエネルギーのような形で顕現していた神が、「人間」に変容しようというのである。人間には神の全貌をとらえることはできないが、神の変容によって神の一つの姿が示されたとも言い換えることも可能であろう。

このように、ヨブの犠牲は元々自ら望んだものではなかったが、自らの運命を主体的に受け容れることで、ヨブ自身の個性化と神の変容を実現するものとなった。

Jungは同書（訳書 1998）において、さらに、キリストについて言及している。神の息子であるキリストは、神とのつながりを失ってしまった人間の罪を贖い、神と人間を和解させるために、人間の形をもって人間の世界に誕生した。Jungは、キリスト誕生時の神の人格化を伴う受肉は「神の革命的な変容」、「神の客観化」（訳書 1998、63頁）を意味しているとし、人間と神の一生を同時に生きるキリストは、ヨブと神とが結合して一つの人格となったかのようであると指摘している。ヨブとの確執から生じた人間になるとの神の意図がキリストの人生と苦悩の中で成就しているというのである。また、キリストの十字架上での「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイによる福音書 27：46）という絶望的な叫びは、ヨブの神に対する問いかけと同じである。神の子であるキリストが死すべき「人間」を体験し、神がヨブに耐え忍ばせたことを経験する瞬間に、「人間」キリストが神性を獲得する。そしてここに、「ヨブへの答え」が与えられるというのである。「人間」キリストとしては愛する弟子たちとの別れや十字架上での恥辱的な死などあらゆる苦しみを避けたいはずである。人間は神とは違って有限な存在でありながら、神とまがうほどの理性が与えられてい

るので、その理性を超える理不尽な運命が与えられると、「なぜ」と問わずにはいられない。その問いをつきつけられた神はヨブの神がヨブの問いに直接の答えを与えないのと同様、沈黙する。そして、神の沈黙の前で、キリストは事実を事実として、与えられた運命を運命として受けとめた。つまり、キリストは人間として生まれてきた以上、定めとして罪を背負っているのだということを認め、生きたいという我意を通すのではなく、神の使命としての自己犠牲を意識的に選び取ったのである。そして、その時、神は一人子イエス・キリストを通じて人間を体験した、というのがJung（訳書 1998）の見方であろうと考えられる。神が人間に理解できる存在となるためには、キリストにならなければならなかったと換言することもできよう。

人間は混沌とした世の中にあって、さまざまな出来事の中に人間の尺度で恒久的な公正さや秩序を求めながら、大いなる神の存在の前で覆されるという経験を繰り返す。善や悪といった人間の尺度ではわりきれない神はJungの挙げたユダヤ教、キリスト教の神のみならず、洋の東西を問わず、ギリシア神話におけるディオニューソス、日本の神話におけるスサノヲ、イスラームのハディルなど、数多くみられ、与えられた理屈のつかない運命への人間の疑問に対する元型的な答えとなっているように思われる。秩序を失った混沌の中に埋没してしまうのではなく、秩序を覆すものに対して「なぜ」という問いを発したときに、人間は主体的に苦難を背負う定めをもって生まれてきた自らの運命を事実として受けとめることによってより大きな秩序に触れることができるということなのであろう。そこに個性化への道があり、そのイニシエーションの果てに大きな秩序や運命との統合的一体感を得ることができるのである。

## III. ドナーの個性化

生体腎移植のドナーになるとき、人はレシピエントを生かしたいという願望に基づいて、自己犠牲の道を選ぶ。家族の一員に腎不全という病が与えられたという事実、そしてその病から家族を救うためには誰かが腎臓を提供しなければならないということは、ヨブに与えられた苦難のように、なぜ自分がそのよ

うな試練を受けなければならないのかと問いかけたくなるような理不尽な事実であるといえる。また、ドナーとなる道を選んだことで、更なる苦しみが与えられるかもしれない。ドナー自身の健康状態に問題が生じることもあり得るし、家族内の関係性が変化して潜在していた問題が顕在化することもあり得る。レシピエントの健康状態が思ったほど改善されない、或いは、ドナーの自己犠牲に対してレシピエントやその他の家族からの感謝の気持ちが示されないなど、期待していた成果が得られないこともあろう。移植腎の機能が思ったよりも早く廃絶してしまうこともあり得る。そのようなときには、ドナーはこころやからだのバランスを崩して、自らの決断に疑問や迷いを感じたり、自らの運命を呪ったり、レシピエントや他の家族を含む他者からの承認や評価を欲したりする。周囲の人々や一般的な価値観、道徳観、既存の概念といった融合的一体感、神秘的融即の中での安らぎを得んとして、受動性の中に埋没してしまいがちになるのである。

生体腎移植という医療においては、腎不全という病を得るという前提から患者およびその家族は受動的にならざるを得ず、手術を含む治療においては医療従事者に身を委ね、移植腎が生着して機能するかどうかということは運命に身を任せるしかない。ドナーをも移植医療の患者に含めるならば、何重もの受動性に包まれる生体腎移植の患者が最大の主体性を発揮するのはドナーが腎提供を決断するときであるといえる。また、その主体性は決断の瞬間のみに発揮されるのではなく、ドナーが自らの決断やそれに続く体験について振り返り、こころとからだを統合していく過程においても発揮されるべきものである。そして、その主体性とは、運命に抗って自らを凌駕するような力をふるうことによって発揮されるものではなく、むしろ自らよりも大きい力に身をゆだね、服従することで発揮される。ヨブがなしたように、毅然とした態度で与えられた事実を事実として主体的に受けとめ、そこに自らの一つの秩序を求め、創造することで、ドナーは運命や神の力といった大いなるものとつながることができるのではないだろうか。家族の腎不全という与えられた苦難に対して、あってはならぬ異物として抗うのではなく、それをこの世の中に事実として存在するもの

と受けとめ、どう携わっていくかということが人間としての尊厳にかかわるといえる。

ドナーにならなければヨブの道、すなわち個性化の過程を歩めないわけではない。家族の中に腎不全という苦難が与えられたときに、逃げる姿勢で腎提供を拒否するならば、与えられた試練に屈服した形となるが、主体性をもって拒否するならば、それはそれでその人の生きる道であるといえる。また、逆にドナーとなったとしても、その意思決定が主体的ではなく、情に流されたり、他の家族や周囲の人々からのプレッシャーに押し切られるようなものであったりすると、後に神秘的融即の中で自己矛盾をおこしかねない。しかし、たとえ意思決定の時点、腎提供の瞬間は神秘的融即の中におろうとも、後から遡る形でその体験を意味付けし、主体的なものに変容させていくことができる。

ドナー、レシピエントの双方の匿名性が守られる死体腎移植とは違って、生体腎移植の場合は、ドナーとレシピエントの多くが血縁者あるいは配偶者であるがゆえに、双方とも互いの存在が常に意識の中にあればこその様々な葛藤が生まれることも想像に難くない。一度腎提供を決断してドナーになると、ドナー、レシピエントという関係性は永続的なものとなり、途中で放り出すわけにはいかない問題が次々に起こり、ヨブの「なぜ」という問いが続く。しかし、問いの答え自体を得ることを目標とするのではなく、その問いを持ち続けながら大いなる秩序の一環として与えられた運命を引き受けていくことによって、ドナーは腎提供という体験のイニシエーションを全うし、運命や生命、存在の根源といった大いなるものとつながった自己の人生の中にその体験を意味づけし、次のステージへと歩をすすめていくことができる。そうすることで、永遠に続くドナーとレシピエントの関係性もその在り方がかわり、ドナーとレシピエントという事実はありながら、神秘的融即の次元を超えて、お互いに「個」としての人間同士の関係性が築かれていくのであろう。

## Ⅳ．おわりに

人間は目の前に苦しむ人がいると、何とかして助けたいと願うものである。

その手段が生体腎移植である場合には、ドナーの腎提供が自発的なものであり、レシピエントがそれを受け容れることを自主的に選ぶことによってはじめて成り立つ医療であり、患者（レシピエントとなる人）とその家族は自己決定権の名のもとで、移植という医療を選択するかしないか、ドナーになるかならないかといった決断を下すことをせまられる。

人間が生きていく上で出会う問題は、そのことが重大な問題であればあるほど、それに対して未来永劫絶対に誤りがないというような答えはない。人間はそういった問題に出会うたびに、何らかの知識や認識、感情、価値観などに支えられながら決断をしていくことになる。また、人間は誰しも一人で生きるものではなく、家族、学校、職場、地域社会、国など、様々な規模、深さの社会に属している。そこで人間関係を構築する中で、暖かい人間同士の繋がりを求め、社会の規範に従い、というように、好むと好まざるにかかわらず、神秘的融即、融合的一体感といったものに包み込まれていく。

家族という神秘的融即の中で、家族を救うことを第一目的として、家族としての愛情、人情、家族とはこうあるべきという社会的な規範や常識などにのっとってドナーは腎提供を決断する。しかし、ドナー本人の個性化のイニシエーションを考えると、ドナーはその神秘的融即を離れて一人の人間として、家族に与えられた苦難である病を自分に与えられた運命として引き受け、その苦難を負うことを決断するものといえる。このように、ドナーの腎提供のプロセスは、レシピエントやその他の家族を含む神秘的融即内での個人的なレベルのものと、そこを離脱してドナー本人の個性化へとむかう元型的なレベルのものとの２本の道が複雑に絡まりあい、補い合いながら進んでいくものである。腎提供という体験の元型的レベルのひとつのゴールは、ヨブが神に意識を与えて変容させたように、病をよく生きるべき一つの人生へと変容させることといってもよいのではないだろうか。ドナーの腎提供は何重もの意味で病を変容させることができる。個人的レベルでは、レシピエントの病自体、QOL を改善し、さらにそのことでレシピエントの病に対する意識をかえることが可能である。また、レシピエントの健康を取り戻すことで、それまで家族全体が呈していた

病の状態を改善することもできる。それと同時に、元型的レベルでは、ドナー本人が、家族の病を自分に与えられた運命として受けとめ、その前に屈服することなく最善をつくすことで生きるべき道を見出していくのである。家族に与えられた病を受動的にうけとめ、能動的に腎提供を決断し、主体的に運命に働きかけて自らのものとしていくというプロセスは腎提供の体験に限らず、人間の辿る道の普遍的なテーマであるといえる。

臨床心理学の立場からこのプロセスに関わる者として、生体腎移植のドナーとは、人間に普遍的な生と死の問題、人間の理解を超えた運命を苦しみながらも引き受け、生き抜いている人であるという視座をもって、ドナーとともにその体験の本質や意味を考えていきたいと考えている。

## V．引用・参考文献

春木繁一．2005.「臓器移植に関連する精神医学的問題－日本における生体腎移植の経験を中心に－」『移植』Vol.40, pp.264-272.

Jung,C.G. 1939. “Bewusstsein, Unbewusstes und Individuation”, Zentraiblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, XI-5, pp.257-270. 林　道義訳「意識、無意識、および個性化」『個性化とマンダラ』みすず書房　1991、pp.49-70.

Jung, C.G. 1950. “Über Wiedergeburt”, Gestaltungen des Unbewußten, Rascher Verlag. 林　道義訳「生まれ変わりについて」『個性化とマンダラ』みすず書房　1991, pp.3-48.

Jung, C.G. 1950. “Zur Empirie des Individuationsprozesses”, Gestaltungen des Unbewußten. Rascher Verlag. 林　道義訳「個性化過程の経験について」『個性化とマンダラ』みすず書房　1991, pp.71-148.

Jung, C.G. 1952. Antwort auf Hiob, Rascher Verlag.　林 道義訳『ヨブへの答え』みすず書房　1988.

日本移植学会広報委員会編．2009.『臓器移植ファクトブック 2009』

日本聖書協会．1995.『旧約聖書』

日本臓器移植ネットワーク．2010.『日本の移植事情　2010 年臓器移植法

改正版』

山本典子．2010.「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察　－グリムのおとぎ話『七羽のからす』をとおして－」『Humanitus』Vol.35, pp.39-49.

山本典子、高原史郎．2010.「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察Ⅰ　腎提供という体験」『今日の移植』Vol.23, pp.157-162.

山本典子、高原史郎．2010.「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察Ⅱ　腎提供という体験」『今日の移植』Vol.23, pp.277-282.